

## 介護福祉士養成校における生活支援技術の授業内容に関する研究(2) —学生から見た生活支援技術の授業内容の成果と課題—

### A study about the course content of “life support skills” in a care worker education school (2) —Effects and problems of the course content of “life support skills” from student’s viewpoint—

永田 智子\* 古川 純\*\*  
NAGATA Tomoko FURUKAWA Jun

Integration and reorganization of educational contents was performed with the partial revision by which it's for a social worker and care worker way enforcement regulations. The purpose of this paper is to clarify the effects and problems of the course content of “life support skills” which is a center of a care workers education curriculum in order to improve it to a better one. The students who attended a course of “life support skills” answered the questionnaire and the interview. The results of comparing the “life support skills” with the “care skills”, it has been suggested that there is a problem with the content structure and time allocation in the “life support skills”. However, the students' growth was seen in the repetition of “class on campus” and “care practicum”. Based on these results, it was indicated that to repeat the combination of “class on campus”, “care practicum”, “class on campus” and “care practicum” would be effective for students. One the other hand, it was suggested that there is room for improvement in how to repeat.

社会福祉士および介護福祉士法施行規則等の一部改正に伴い、教育内容の統合再編が行われた。介護福祉士養成カリキュラムの中枢であろう「生活支援技術（2009年度施行カリキュラム）」のよりよい内容と方法を検討するため、学生から見た内容の成果と課題を明らかにする。「生活支援技術」を受講した学生にアンケート調査およびインタビュー調査を行った。2002年度施行カリキュラムの「介護技術」と2009年度施行カリキュラムの「生活支援技術」を比較した結果、「介護技術」より「生活支援技術」には内容構成及び時間の配分に課題があることが示唆された。しかし、「学内授業」と「介護実習」を繰り返す中での成長も伺えた。これらの結果を踏まえて、現在の「学内授業」→「介護実習」→「学内授業」→「介護実習」の組み合わせを繰り返すことが有効であることがわかった。一方で、繰り返しの方法について工夫の余地があることが示唆された。

キーワード：介護福祉士養成課程、生活支援技術、アンケート調査、インタビュー

Key words : care worker education course, life support skills, questionnaire survey, interview investigation

#### 1. 問題の所在と研究目的

2007年11月28日に社会福祉士及び介護福祉士法が改正され、社会福祉士養成課程及び介護福祉士養成課程における教育カリキュラムが見直された（表1）。

本稿では、改正前のものを2002年度施行カリキュラム、改正後のものを2009年度施行カリキュラムと呼ぶことにする。

2009年度施行カリキュラムの教育内容は、大枠では時間を示されているが、教育内容の細かな時間配分は各介護福祉士養成校の裁量にゆだねる仕組みとなった。これにより、各介護福祉士養成校の特色や多様性が高められ

ることになる。中澤<sup>1)</sup>が指摘しているように、具体的な教育内容および方法を各介護福祉士養成校の判断に委ねるのは、各校の教育方法が異なることから、卒業生の質が統一されない状況が生じる。介護福祉士の資格を有する卒業生の質が統一されないことにより、介護福祉士としての質の均一または向上とはならない。そのことから、統一的な内容と方法の検討が必要であり、本研究では、2009年度施行カリキュラムの中枢であろう「生活支援技術」について検討することにした。

永田・古川<sup>2)</sup>は、「生活支援技術」の類似科目である「介護技術」を受講した学生に調査した。その結果、「介

\* 兵庫教育大学大学院教育内容・方法開発専攻行動開発系教育コース

\*\* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科(修士課程)

表1 2002年度施行カリキュラムと2009年度施行カリキュラム比較図

2002年度施行カリキュラム			2009年度施行カリキュラム		
領域	教育内容	時間	領域	教育内容	時間
基礎	人間とその生活の理解	120	人間と社会	人間の尊厳と自立	30
専門科目	介護概論	60		人間関係とコミュニケーション	30
	医学一般	90		社会の理解	60以上
	精神保健	30		上記科目のほか、選択科目	
	社会福祉概論	60	介護	介護の基本	180
	老人福祉論	60		コミュニケーション技術	60
	障害者福祉論	30		生活支援技術	300
	リハビリテーション論	30		介護過程	150
	社会福祉援助技術	30		介護総合演習	120
	社会福祉援助技術演習	30		介護実習	450
	レクリエーション活動援助法	60		こころとからだのしくみ	発達と老化の理解
	老人・障害者の心理	60	認知症の理解		60
	家政学概論	60	障害の理解		60
	家政学実習	90	こころとからだのしくみ		120
	介護技術	150			
	形態別介護技術	150			
	介護実習指導	90			
	介護実習	450			

「介護技術」の授業時間数は十分ではないが、実技や理論を習得・理解できたと考えている学生が多いことから、授業内容はおおむね妥当であることが確認できた。しかし、「介護技術」の時間数が150時間から「生活支援技術」では300時間へと増加となったことから、「介護技術」の結果を踏まえて「生活支援技術」において、どのような内容及び時間の配分がより適しているのかを検討する必要がある。そのため、本稿ではA介護福祉士養成校における2009年度施行カリキュラムを受講する学生から見た「生活支援技術」の内容の成果と課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

2009年度施行カリキュラム受講の2009年度入学生に対してアンケート調査およびインタビュー調査を実施する。また、「介護技術」を受講した2008年度生と「生活支援技術」を受講した2009年度生との比較を行う。

### 2.1 研究対象の教育内容

厚生労働省がいう2009年度施行カリキュラムの「介護」の領域の目的は、①介護サービスを提供する対象、場によらず、あらゆる介護場面に汎用できる基本的な介護の知識・技術を養う、②自立支援の観点から介護実践できる能力を養う、③利用者のみならず、家族等に対する精神的支援や援助のために、実践的なコミュニケーション能力を養う、④多職種協同やケアマネジメントなどの制度の仕組み踏まえ、具体的な事例について介護過程を展開できる能力を養う、⑤リスクマネジメント等、利用者の安全に配慮した介護を実践する能力を養う、とされている。

その介護の領域の中の一つである「生活支援技術」の

ねらいは次の通りである。「尊厳の保持の観点から、どのような状態であっても、その人の自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出したり、見守ることも含めた適切な介護技術を用いて、安全に援助できる技術や知識について習得する学習とする」、である。また、「教育に含むべき事項」として、①生活支援、②自立に向けた居住環境の整備、③自立に向けた身じたくの介護、④自立に向けた移動の介護、⑤自立に向けた食事の介護、⑥自立に向けた入浴・清潔保持の介護、⑦自立に向けた排泄の介護、⑧自立に向けた家事の介護、⑨自立に向けた睡眠の介護、⑩終末期の介護、以上の10項目が挙げられている。これらは、2007年の法改正により介護福祉士の定義規定として「専門的知識及び技術をもつて、心身の状況に応じた介護」（原文のまま）等を行うことを業とする者<sup>3)</sup>に改定されたように、基本的介護技術だけでなく生活全体へも着目し、どのように支援するかを身につける事が含まれたのである。

### 2.2 アンケート調査

#### 2.2.1 対象者

A介護福祉士養成校の「介護技術」<sup>4)</sup>の授業内容を受講した2008年度生9名。別表1～3の「生活支援技術」の授業内容を受講した2009年度生15名。

#### 2.2.2 調査日

2008年度生は、第1回目調査を「介護技術」の全カリキュラム終了後の2009年7月1日に実施した。第2回目調査を全介護実習終了後の2009年11月5日に実施した。

2009年度生は、第1回目調査を「生活支援技術」の2年生前期終了後の2010年7月14日に実施した。第2回目調査を全介護実習終了後の2010年10月25日に実施した。



図1 「介護技術」から「生活支援技術」への改編、A校の内訳

内容	実技・習得度				理論・理解度				実技・時間数			理論・時間数		
	とても出来る	やや出来る	あまり出来ない	全く出来ない	とても分かる	やや分かる	あまり分からない	全く分からない	多い	適切	少ない	多い	適切	少ない
① ベッドメイキング	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

図2 調査に使用したアンケート(一部)

### 2.2.3 アンケート調査内容と調査方法

2002年度施行カリキュラムの「介護技術」、「レクリエーション」、「家政学概論」、「家政学実習」、「形態別介護技術」は、2009年度施行カリキュラムの「生活支援技術」(300時間)において大部分を占める再編となった(図1)。その中で、A介護福祉士養成校は、「生活支援技術」を「基本的介護技術」、「レクリエーション」、「被服・家庭経営」、「調理」、の4科目にそれぞれ配分した。

本稿では「生活支援技術」の中でも、「基本的介護技術」に着眼した。「基本的介護技術」は2002年度施行カリキュラムの「介護技術」とほぼ同じ内容であることから、2008年度生と同じ以下の19項目を調査項目とした。

- ①ベッドメイキング、②コミュニケーションの技法、③観察とアセスメント、④体位変換・歩行介助、⑤運動・移動の技法(車椅子)、⑥着脱介助、⑦排泄介助、⑧清拭・洗髪・部分浴、⑨食事介助、⑩口腔ケア、⑪安楽の技法、⑫安全で快適な住まい・環境整備、⑬福祉用具の概要と活用、⑭入浴介助、⑮終末期の介護、⑯状態の変化の確認と不調のきざしの発見の技法、⑰医療対応時の介護、⑱緊急時の対応、⑲記録と報告。

前述の項目ごとに、「実技・習得度」、「理論・理解度」、「実技・時間数」、「理論・時間数」を図2のように設定した。技術の習得度は根本である根拠を理解していなければ習得に繋がらないのではないかと考えた。その為に習得度、理解度を調べる必要がある。また、その項目によって適切な時間に繋がっているのかを調べる必要があると考えた。

### 2.2.4 分析方法

算出方法は次の通りである。「実技・習得度」は、

‘とても出来る’を3、‘やや出来る’を2、‘あまり出来ない’を1、‘全く出来ない’を0とした4点法とする。続いて、「理論・理解度」は、‘とても分かる’を3、‘やや分かる’を2、‘あまり分からない’を1、‘全く分からない’を0とした4点法。「実技・時間数」及び「理論・時間数」においては、‘多い’を1、‘適切’を0、‘少ない’を-1とした3点法とし、9人の平均と標準偏差を求めた。また、2009年度生の7月と10月の結果の差について、ウィルコクソンの符号順位検定を行い、2008年度生と2009年度生の結果の差については、対応のない2群の差の検定を行った。

### 2.3 インタビュー調査

#### 2.2.1 対象者

A介護福祉士養成校。「生活支援技術」のアンケート調査を実施した2009年度生15名のうち、インタビュー調査への協力を快諾してくれた6名。

#### 2.3.2 調査日

- 2010年12月7日
- 2010年12月14日

#### 2.3.3 インタビュー調査内容と調査方法

1) 何故、結果があがったのか、2) 何故、時間数が少なく感じたのか、3) 内容構成はどうだったか、の3項目について6名にインタビューを個別に実施した。一人あたりの時間はおよそ10分であった。

#### 2.3.4 分析方法

①～③の6名のインタビュー調査結果を内容別に分類

を行う。

### 3. 結果と考察

#### 3.1.1 2008年度生へのアンケート

2008年度生への「介護技術」に関するアンケート調査結果は表2の通りである。実技の習得度や理論の理解度に関して、7月の第1回目調査では、平均2.0（やや出来る／やや分かる）以上は、「実技・習得度」で2項目、「理論・理解度」では4項目であった。逆に、平均1.0（あまり出来ない／あまり分からない）以下は、「実技・習得度」で4項目、「理論・理解度」では1項目であった。11月の第2回目調査では、平均2.0以上は、「実技・習得度」で9項目、「理論・理解度」では13項目と増加した。一方、平均1.0以下は、「実技・習得度」で1項目、「理論・理解度」では0項目と減少した。

時間数に関して、7月の第1回目調査では、平均0.00未満（少ない）は、「実技・時間数」で16項目、「理論・時間数」では5項目であった。11月の第2回目調査においても平均0.00未満は、「実技・時間数」で10項目、「理論・時間数」では6項目であった。

以上より、授業時間数は十分ではないが、実技や理論を習得・理解できていると考えている学生が多いことから、「介護技術」の授業内容は学生から見ておおむね妥当であると考えられる。

#### 3.1.2 2009年度生へのアンケート

2009年度生への「生活支援技術」に関するアンケート調査結果は表3の通りである。7月の第1回目調査において、平均2.0（やや出来る／やや分かる）以上の項目が、「実技・習得度」は2項目、「理論・理解度」は7項目であった。逆に平均1.0（あまり出来ない／あまり分からない）以下は、「実技・習得度」及び「理論・理解度」では0項目であった。10月の第2回目調査では、平均2.0（やや出来る／やや分かる）以上の項目が、「実技・習得度」は6項目、「理論・理解度」は10項目とやや増加したものの、有意差はなかった。

時間数に関して、7月の第1回目調査では、平均0.00未満（少ない）は、「実技・時間数」で16項目、「理論・時間数」では15項目であった。11月の第2回目調査においても平均0.00未満は、「実技・時間数」で18項目と増加し、「理論・時間数」では変わらずの15項目であった。

#### 3.1.3 2008年度生と2009年度生の比較

前述のとおり、実技の習得度や理論の理解度に関して、2008年度生は平均2.0（やや出来る／やや分かる）以上が、「実技・習得度」で2項目から9項目へ、「理論・理解度」では4項目から13項目へと増加した。それに対し、2009年度生は平均2.0（やや出来る／やや分かる）以上が、「実技・習得度」で2項目から6項目へ、「理論・理

表2 2008年度入学生／介護技術の実技習得度・理解度、時間数

永田・古川 2010, p141より引用

	①ヘッドメイク		②コシコシの技法		③観察とアセスメント		④運動・移動の技法 (体位変換・歩行介助)		⑤運動・移動の技法 (車椅子)		⑥着脱介助		⑦排泄介助	
	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解
7月	2.11	2.22	1.78	1.89	1.44	1.98	1.93	1.89	1.75	1.67	1.78	1.44	2.00	2.00
11月	2.67	2.67	2.93	2.11	2.11	2.00	2.22	2.00	2.93	2.93	2.22	2.22	2.11	2.93
							*		*					
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間
7月	0.56	0.33	-0.11	0.22	0.11	0.33	-0.67	0.22	-0.22	0.11	-0.44	0.22	-0.33	0.11
11月	-0.11	-0.11	0.11	0.11	0.11	0.00	0.11	0.11	-0.11	0.22	0.11	0.00	0.00	0.00
	*						*							
	⑧清拭/洗髪/部分浴		⑨食事介助		⑩口腔ケア		⑪安楽の技法		⑫安全で快適な住まい/環境整備		⑬福祉用具の概要と活用			
	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解
7月	1.75	1.78	2.11	2.22	1.44	1.75	1.93	1.50	1.44	1.93	1.93	1.78		
11月	2.22	2.44	2.44	2.33	1.89	2.11	1.89	2.11	1.89	1.89	1.78	2.11		
							*							
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間
7月	-0.56	0.11	-0.11	0.11	-0.33	0.11	-0.33	-0.13	-0.33	-0.11	-0.22	0.00		
11月	-0.22	0.00	0.11	0.00	-0.44	0.00	-0.11	0.00	0.11	0.00	0.11	0.11		
	⑭入浴介助		⑮終末期の介護		⑯状態の変化の確認と不調のきざしの発見の技法		⑰医療対応時の介護		⑱緊急時の対応		⑲記録と報告			
	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解
7月	1.75	1.89	1.00	1.33	0.88	1.33	0.63	1.00	0.63	1.56	1.11	2.13		
11月	1.89	1.67	1.00	1.33	1.67	1.56	1.22	1.67	1.33	1.44	1.56	2.00		
					*									
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間
7月	-0.22	0.22	-0.44	-0.11	-0.44	-0.11	-0.67	-0.22	-0.33	-0.22	0.00	0.22		
11月	0.00	-0.11	-0.33	-0.11	-0.13	-0.22	-0.11	0.00	-0.44	-0.56	-0.33	-0.33		

\* P < 0.05      \*\* P < 0.01

解度」では7項目から10項目と微増に留まった。

また、実技および理論の時間数に関しては、2008年度生は平均0.00未満(少ない)が、「実技・時間数」で16項目から10項目へ減少したが、「理論・時間数」では6項目から6項目と変わらなかった。一方、2009年度生は、平均0.00未満(少ない)が、「実技・時間数」で16項目から18項目へ、「理論・時間数」では15項目から15項目へと減少することがなかった。

「介護技術」を受講した2008年度生と「生活支援技術」を受講した2009年度生との平均を比較した(表4)。これは2008年度生は2009年11月、2009年度生は2010年10月の結果である。

多くの項目において、平均値は2009年度生の方が低い結果となっており、「①①安楽の技法」での「実技・時間数」、「③福祉用具の概要と活用」での「理論・理解度」および「実技・時間数」の項目において有意差が見られた(P<0.05)。

このことから、2008年度生に比べて2009年度生は実技の習得度や理論の理解度に関して、「出来る」、「分かる」の項目があまり増加しておらず、2008年度生ほどの増加が見られなかった。そして実技および理論時間数に関しては、「少ない」と感じる項目が減少せずに逆に増加がみられた。よって、2008年度生より2009年度生には内容及び時間の配分に課題があることが示唆された。

### 3.1.4 実技・習得度

2009年度生への「生活支援技術」に関するアンケート調査結果(表3)では、「②コミュニケーション」の実技・習得度が2.00未満であった。このことは、介護実習において障害や疾病の幅広い利用者とコミュニケーションを図ろうと、前回調査の時点よりコミュニケーション能力が求められる一歩踏み込んだことにより生じた結果と考える。

「③観察とアセスメント」の実技・習得度は2.00未満であった。学生個々が必要とするアセスメントが思うように進まなかったことが原因と考える。A介護福祉士養成校では、2年生の介護実習において一人の利用者の『個別援助計画』を実施することになっており、利用者との関わりの中で計画をするための観察力や情報収集力が実施すればできるという自分自身の予想と現実の相違ではないかと考える。

### 3.1.5 理論・理解度

2009年度生への「生活支援技術」に関するアンケート調査結果では、理論に関して「⑩口腔ケア」は、2.00から1.80へと、「⑭入浴介助」は1.93から1.80、「⑯状態の変化の確認と不調のきざしの発見の技法」も1.47から1.40と第1回目調査の7月より下がった結果となった。また、「⑩口腔ケア」から「⑱緊急時の対応」までの項

表3 2009年度入学生/生活支援技術の実技習得度・理解度、時間数

	①ヘルメット作り		②コミュニケーションの技法		③観察とアセスメント		④運動/移動の技法 (体位変換・歩行介助)		⑤運動・移動の技法 (車椅子)		⑥着脱介助		⑦排泄介助	
	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解
7月	2.33	2.47	1.67	2.00	1.86	1.78	1.93	2.00	2.14	2.20	1.80	2.07	1.80	2.00
10月	2.53	2.73	1.93	2.07	1.53	2.00	1.80	2.27	2.20	2.33	2.20	2.33	2.00	2.27
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間
7月	-0.07	0.00	0.00	-0.13	0.00	-0.13	-0.77	0.00	-0.07	0.00	0.00	0.00	-0.13	-0.07
10月	0.20	0.20	-0.07	-0.07	-0.27	-0.07	-0.20	0.00	-0.07	0.00	-0.07	0.07	-0.07	-0.07
	⑧着脱/洗髪/部分浴		⑨食事介助		⑩口腔ケア		⑪安楽の技法		⑫安全で快適な住まい/環境整備		⑬福祉用具の概要と活用			
7月	1.80	1.87	1.93	1.93	1.80	2.00	1.20	1.43	1.27	1.60	1.40	1.53		
10月	2.13	2.07	2.20	2.33	1.67	1.80	1.60	1.80	1.60	1.87	1.36	1.57		
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間		
7月	-0.53	-0.13	-0.27	-0.20	-0.40	-0.20	-0.86	-0.29	-0.27	-0.27	-0.33	-0.33		
10月	-0.33	-0.27	-0.13	-0.13	-0.40	-0.27	-0.47	-0.40	-0.40	-0.13	-0.29	-0.21		
	⑭入浴介助		⑮終末期の介護		⑯状態の変化の確認と不調のきざしの発見の技法		⑰医療対応時の介護		⑱緊急時の対応		⑲記録と報告			
7月	1.73	1.93	1.13	1.80	1.27	1.47	1.27	1.57	1.20	1.53	1.53	1.87		
10月	1.87	1.80	1.07	1.47	1.33	1.40	1.20	1.53	1.00	1.47	1.80	2.00		
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間		
7月	-0.40	-0.27	-0.33	-0.27	-0.33	-0.20	-0.33	-0.13	-0.47	-0.47	-0.27	-0.27		
10月	-0.20	-0.27	-0.53	-0.47	-0.53	-0.47	-0.40	-0.27	-0.40	-0.27	-0.27	-0.27		

\* P<0.05 \*\* P<0.01

目は、前回と同様に2.00未満であった。これらは、永田・古川<sup>4)</sup>での2008年度生と同様に経験や体験の少なさから生じた結果であると考えられる。

また、「⑭入浴介助」が下がったのは、個々の状況に応じた知識の理解が必要とされ対応できなかった結果とも考えられる。入浴は身体の汚れを取るという目的だけでなく、障害のレベルや疾病に応じた、残存能力を活用し個々の入浴習慣を取り入れ、安全な方法が求められる。そして、入浴介助には着脱、立位、座位、洗髪、洗身、移乗などの様々な動作が集約されている。

### 3.1.6 実技・時間

2009年度生への「生活支援技術」に関するアンケート調査結果では、「⑦排泄介助」、「⑧清拭・洗髪・部分浴」、「⑨食事介助」の実技・時間数が第1回目調査より少なく感じる結果となった。これらの項目は、実技・習得度は上がっていることから、共通して言えることは実技として実施ができるが、より幅広い障害や疾病を持つ利用者への対応には、現状より実技の時間数を割く必要があると考えられる。

### 3.1.7 理論・時間

2009年度生への「生活支援技術」に関するアンケート調査結果では、第1回目調査の結果では、全ての項目が0.00以下であったが、第2回目調査では「①ベッドメイ

キング」、「④体位変換・歩行介助」～「⑥着脱介助」の4項目を除いて、0.00以上の結果となった。理解度と比例して‘少ない’と感じているのは、時期が進むにつれて、必要とされる知識が幅広くなってきている結果と考ええる。

### 3.1.8 考察

2009年度生への「生活支援技術」に関するアンケート調査結果では、第1回目調査の7月より評価が上がった。これは全介護実習終了により、卒業後に働く介護現場での立場との比較もあり自信への裏付けが出来た結果と考ええる。また、介護現場で実践頻度の高い‘食事’、‘排泄’や‘移乗’等の項目が評価されたと言えよう。しかしながら、評価が下がった結果は、周囲の状況からより高いレベルや知識を求められることに対応が出来なかったことが考えられる。

また、「実技・習得度」および「理論・理解度」に対して実技および理論・時間数が比例せずに‘少ない’と感じている項目が多い事は、広く浅くの技術および知識となっていると考えられる。よって一つひとつの項目、項目毎に連動し、繋がりをもった内容にする必要性が示唆された。

### 3.2.1 インタビュー調査結果

インタビュー調査項目の①～③を内容別に分類した。

表4 2008年度・介護技術(2009年11月)/2009年度生・生活支援技術(2010年10月)の実技習得度・理解度、時間数

	①ベッドメイキング		②トイレへの技法		③観察と対応		④運動/移動の技法 (体位変換・歩行介助)		⑤運動・移動の技法 (車椅子)		⑥着脱介助		⑦排泄介助	
	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解
2008年度生	2.87	2.87	2.33	2.11	2.11	2	2.22	2.00	2.33	2.33	2.22	2.22	2.11	2.33
2009年度生	2.58	2.78	1.98	2.07	1.58	2.00	1.80	2.27	2.20	2.38	2.20	2.38	2.00	2.27
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間
2008年度生	-0.11	-0.11	0.11	0.11	0.11	0	0.11	0.11	-0.11	0.22	0.11	0.00	0.00	0.00
2009年度生	0.20	0.20	-0.07	-0.07	-0.27	-0.07	-0.20	0.00	-0.07	0.00	-0.07	0.07	-0.07	-0.07

  

	⑧清拭/洗髪/部分浴		⑨食事介助		⑩口腔ケア		⑪安楽の技法		⑫安全で快適な住まい/環境整備		⑬福祉用具の 概要と活用	
	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解
2008年度生	2.22	2.44	2.44	2.33	1.89	2.11	1.89	2.11	1.89	1.89	1.78	2.11
2009年度生	2.18	2.07	2.20	2.33	1.67	1.80	1.60	1.80	1.60	1.87	1.86	1.57
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間
2008年度生	-0.22	0.00	0.11	0.00	-0.44	0.00	-0.11	0.00	0.11	0.00	0.11	0.11
2009年度生	-0.33	-0.27	-0.13	-0.13	-0.40	-0.27	-0.47	-0.40	-0.40	-0.13	-0.23	-0.21

  

	⑭入浴介助		⑮終末期の介護		⑯状態の変化の確認と不調のきざしの発見の技法		⑰医療対応時の介護		⑱緊急時の対応		⑲記録と報告	
	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解	実/習得	理/理解
2008年度生	1.89	1.67	1.00	1.33	1.67	1.58	1.22	1.67	1.33	1.44	1.58	2.00
2009年度生	1.87	1.80	1.07	1.47	1.33	1.40	1.20	1.58	1.00	1.47	1.80	2.00
	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間	実/時間	理/時間
2008年度生	0.00	-0.11	-0.33	-0.11	-0.13	-0.22	-0.11	0.00	-0.44	-0.58	-0.33	-0.33
2009年度生	-0.20	-0.27	-0.53	-0.47	-0.53	-0.47	-0.40	-0.27	-0.40	-0.27	-0.27	-0.27

\* P<0.05    \*\* P<0.01

表5 2009年度生インタビュー調査結果(一部)

①なぜ、結果があがったのか	
実習経験	A 施設実習に行き利用者と接することにより、介護に対して充実感、楽しさが感じられ意欲が出た。
	B 学生との練習でなく、本当の利用者さんを介助することによって(施設実習を終える度)自信が出た。
	C 施設実習により自分自身の変化が実感できたから。
自己の学び	D 実習後で自分自身に何が足りないかもわかった。それで目的意識がよくわかって、学ぶことも多かったから。
	F 1年生から勉強を積み重ねてきたから。
②なぜ、時間数が少なく感じたのか	
回数	A 項目を1回実施して終わりだから、少なく思う。1回で終わりじゃなく、何回か繰り返した方がよかった。
	B 施設実習や授業で実施を重ねることにより、「これは忘れてい・・・」とリアルに振り返り、「もっとやっどけば」とも思い、少ないと感じる。
内容項目のバランス	C 個々に実力も違うし、自分達が必要としている部分も違う。だから、それぞれの目標(求める項目)のレベルが異なるから、自分てきには少なく感じる項目もあったので不満足に思える。
	D 授業の中で雑談が多く・・・オムツ交換も多いので口腔ケアとか項目によって、バランスが悪いので少ないと感じた。
③内容構成はどうだったか	
順番	A 単発に感じる。朝、昼、夜と1日の生活スタイルに合わせて、一連の動作として構成して欲しい。朝の起床介助から、整容、朝食介助、排泄介助、入浴介助・・・といった様に。
	C 先に実技で実践してから、理論の説明をした方が、なぜ出来たかの方法が分かりやすい。
内容項目のバランス	B 「ターミナルケア」や「緊急時の対応」とか実際に現場では難しいものを学校で増やして欲しかった。実習施設では、なかなか体験できるものでもないし、お願いできるものでもない。
理論・実技のバランス	D 教室での教科書を使ってる理論より、実習室で実際にする実技が多い構成のほうがよかった。
回数	E 授業では1回しかしない項目ばかりなので、年に2、3回くらいに振り返るような形で増やして欲しい。1年生の時に終わったのも、2年生でも復習や応用としてやって欲しい。

その結果(一部)は表5に示す通りである。

①「なぜ、結果があがったのか」という質問に対し、「施設実習に行き利用者と接することにより、介護に対して充実感、楽しさが感じられ意欲が出た」、「施設実習により自分自身の変化が実感できたから」等の回答を『実習経験』と分類した。

また、「実習後で自分自身に何が足りないかもわかった。それで目的意識がよくわかって、学ぶことも多かったから。」、「1年生から勉強を積み重ねてきたから。」の回答を『自己の学び』とした。

2008年度生および2009年度生は「介護実習」をも基準に考えた結果はほぼ同じであった。基本的介護技術は、「よりよい人生」、「よりよい生活」を実現する介護の目的達成の1つの技法であるということが理解できていると言えよう。しかしながら、2009年度生は、漠然と介護実習を捉えているが、2008年度生は、「学校で習った技術を習得していると感じていても(中略)利用者は、怪我や傷をつけてはいけないという緊張感もあり、現実には排尿があったりするので、現実味もある」<sup>5)</sup>と、より具体的に捉える傾向がみられた。自己課題の原因分析を明確にすることができれば、2009年度生も更なる習得度が

期待できると考える。

②「なぜ、時間数が少ないと感じたのか」という質問に対し、「項目を1回実施して終わりだから、少なく思う。1回で終わりじゃなく、何回か繰り返した方がよかった。」等を『回数』とした。「個々に実力も違うし、自分達が必要としている部分も違う。だから、それぞれの目標(求める項目)のレベルが異なるから、自分てきには少なく感じる項目もあったので不満足に思える。」等を『内容項目のバランス』とし、二つの項目に分類した。

2008年度生および2009年度生の両年度生ともに実技の回数についての指摘が多く見受けられた。実技の技術は教えられ伝え聞いても、自分自身で感覚的に感じ取る固有のものである。反復的に行うことは重要であるが、各項目の回数は個々によって異なるものである。

③「内容構成はどうだったか」という質問に対し、「「ターミナルケア」や「緊急時の対応」とか実際に現場では難しいものを学校で増やして欲しかった。実習施設では、なかなか体験できるものでもないし、お願いできるものでもない。」を『内容項目のバランス』とした。「先に実技で実践してから、理論の説明をした方が、なぜ出来たかの方法が分かりやすい。」、等を『順番』

とした。「授業では1回しかしない項目ばかりなので、年に2、3回くらいに振返るような形で増やして欲しい。1年生の時に終わったのも、2年生でも復習や応用としてやって欲しい。」を『回数』とした。また、「教室での教科書を使って（中略）実技が多い構成のほうがよかった」を『実技・理論のバランス』とし、四つに分類した。

『内容項目のバランス』、『順番』、『実技・理論のバランス』、『回数』と四つに分類されるが、これら内容構成への指摘は、原理原則の重要性大切を踏まえて、より実践的に学びたいという思いが共通して現れていると言える。

### 3.2.2 考察

「1年生から勉強を積み重ねてきたから」という意見もあり、やはり最初から難しい内容では、なかなか吸収できないものである。しかし、自己に何が必要なのかを理解することができ、反復する。そのことにより、事実を客観的に捉えたり、根拠を考えたりする思考が身についたのであろう。

また、多くの指摘がみられた‘介護実習’は、自信というものと背中合わせとなっていると言える。自信をもって興味も沸き、熱心に耳を傾けたり、自ら学ぼうとしたりするものでもある。よって、人間的成長により技術的な進歩へとも繋がると考える。

また、項目毎に連動し繋がりをもった内容にする必要性はアンケート調査結果でも示唆された。これに加えて反復的に実践した後、さらに利用者の1日として捉えた援助項目（起床～就寝/起床）の連動の必要性も示唆された。

## 4. 総体考察

介護現場において、「④体位変換・歩行介助」、「⑤運動・移動の技法(車椅子)」、「⑦排泄介助」、「⑨食事介助」、「⑭入浴介助」、の項目が日々の生活の中で実施することが多いと思われる項目である。インタビュー調査においても、回数が少ないと感じている結果が示され、アンケート調査結果でも特に「⑭入浴介助」の実技・習得度が低い（2.00以下）結果を示した。2008年度生および2009年度生の両学年共に反映されていた。よって、A介護福祉士養成校において、1度の実技で終了していた「⑭入浴介助」を繰り返し行う必要性は他の項目より高いと考えられる。

さらに各項目の反復的に学ぶ学習は「項目復習」、「1日の生活サイクルとしての連動性」、「レベルを変えた応用」の3つに分類できる。

まずは基本的な技術を「項目復習」で身につける必要がある。

また、項目毎に単体であるが、動作・行動としては一

連の技術として成り立つものがある。例えば、朝から排泄介助、着脱介助、移乗介助、食事介助、口腔ケア、入浴介助、ベッドメイキング、そしてお昼といったように、利用者の生活1日を支援している技術の連動性も学ぶ必要がある。これを「1日の生活サイクルとしての連動性」とした。

「レベルを変えた応用」は、利用者の状態よっての個別性があることから、状況に応じた対応力を養う必要がある。

この段階に応じた復習により、実技・習得度がより一層高まると考える。しかし、これらは理論的な知識があることにより、適切な支援方法や対応方法、潜在能力を引き出す方法へと導かれるものである。

また、学内授業で基盤を作り、介護実習でステップアップや課題抽出がなされることを踏まえて、フォローアップが出来る教授方法も求められると考える。

## 5. まとめ及び今後の課題

2002年度施行カリキュラム受講の「介護技術」と2009年度施行カリキュラムの「生活支援技術」を比較した結果、「介護技術」より「生活支援技術」には内容及び時間の配分に課題があることが示唆された。しかし、「生活支援技術」においても、授業開始時点と終了時点では、学生の学びに対する意識や主体性が高まっていた。特に、「学内授業」と「介護実習」を繰り返す中での成長が伺えた。これらの結果を踏まえて、現在の「学内授業」→「介護実習」→「学内授業」→「介護実習」の組み合わせを繰り返すことは有効であると言える。

しかし、アンケート及びインタビュー調査から、単純な反復学習ではなく、「項目復習」や「一日の生活サイクルとしての連動」「レベルを変えた応用」など繰り返し方に工夫の余地があることが示唆された。

よって、これらを踏まえた教育内容を研究することが、今後の課題である。

### 【引用文献】

- 1) 中澤秀一「資格取得時の介護福祉士の目標」の資質取得における課題～「新カリキュラム案」を手掛かりとして 第15回日本介護福祉教育学会、2008年、pp.148-149
- 2) 永田智子・古川純「介護福祉士養成校における生活支援技術の授業内容に関する研究(1)」『兵庫教育大学研究紀要 第38巻』2011年、pp.137-145
- 3) 田中英雄「社会福祉士・介護福祉士・社会福祉主事関係法令通知集」第一法規 2002年、pp.197
- 4) 永田智子・古川純「同書」2011年、pp.143-145
- 5) 永田智子・古川純「同書」2011年、pp.142



【参考文献】

- 1) 「<改訂版> 社会福祉士・介護福祉士・社会福祉主事関係法令通知集」 第一法規 2009年4月
- 2) 介護福祉士養成講座編集委員会「介護技術Ⅰ」 中央法規 2009年
- 3) 介護福祉士養成講座編集委員会「介護技術Ⅱ」 中央法規 2009年
- 4) 介護福祉士養成講座編集委員会「介護技術Ⅲ」 中央法規 2009年
- 5) 柴田範子、白井孝子、本名靖、綿祐二編著「生活支援技術Ⅰ」 建帛社 2009年
- 6) 井上由起子、荏原順子、中川英子、本名靖、山岡喜美子「生活支援技術Ⅱ」 建帛社 2009年
- 7) 久保田トミ子、白井孝子、柴田範子、山崎イチ子「生活支援技術Ⅲ」 建帛社 2009年
- 8) 川村佐和子、後藤真澄、中川英子、山崎イチ子、山谷里希子 「生活支援技術Ⅳ」 建帛社 2009年

別表1 2009年 生活支援技術 授業内容／前期

コマ数	内 容	授業・種類	項目番号
1, 2	序章 生活支援技術を学ぶにあたって	講義・実習	
3, 4	Ⅱ 第1章 人間形成の技術	講義・実習	②
5, 6	Ⅱ 第1章 人間形成の技術	実習	②
7, 8	Ⅱ 第1章 人間形成の技術	講義	③
9, 10	Ⅱ 第1章 人間形成の技術	実習	③
11, 12	Ⅱ 第2章 姿勢保持、移動、移乗の支援技術	講義	③
13, 14	Ⅱ 第2章 姿勢保持、移動、移乗の支援技術	実習	⑤
15, 16	Ⅱ 第2章 姿勢保持、移動、移乗の支援技術	実習	⑤
17, 18	Ⅲ 第5章 運動・移動の技法 Ⅲ 第6章 社会生活の維持拡大	実習	⑤
19, 20	Ⅲ 第1章 「お風呂」という生活の支援	講義	⑭
21, 22	Ⅲ 第1章 「お風呂」という生活の支援	実習	⑭
23, 24	Ⅲ 第1章 「お風呂」という生活の支援	実習	⑭
25, 26	Ⅲ 第3章 「着る・装う」という生活の支援	講義・実習	⑥、⑦
27, 28	Ⅲ 第3章 「着る・装う」という生活の支援	実習	⑥、⑦
29, 30	まとめ	実習	

※ 1コマ=90分

別表2 2009年 生活支援技術 授業内容/後期

コマ数	内 容	授業・種類	項目 番号
1, 2	実習フィードバック	実習	
3, 4	Ⅳ 第4章「排泄」という生活の支援	講義・実習	⑦
5, 6	Ⅳ 第4章「排泄」という生活の支援	実習	⑦
7, 8	Ⅳ 第4章「排泄」という生活の支援	実習	⑦
9, 10	Ⅲ 第2章 「身だしなみ・化粧」という生活の支援	講義・実習	⑧
11, 12	Ⅲ 第2章 「身だしなみ・化粧」という生活の支援	実習	⑧
13, 14	Ⅲ 第2章 「身だしなみ・化粧」という生活の支援	実習	⑧
15, 16	Ⅳ 第1章「食べる」という生活の支援	講義・実習	⑨
17, 18	Ⅳ 第1章「食べる」という生活の支援	実習	⑨
19, 20	Ⅳ 第1章「食べる」という生活の支援	講義・実習	⑨、⑩
21, 22	安楽の技法	講義・実習	⑪
23, 24	安楽の技法	実習	⑪
25, 26	まとめ	講義・実習	
27, 28	まとめ	実習	
29, 30	まとめ	実習	

※ 1コマ=90分

別表3 2010年 生活支援技術 授業内容／前期

コマ数	内 容	授業・種類	項目 番号
1, 2	オリエンテーション	講義	
3, 4	Ⅱ 第4章 生活を支える「すまい・環境」の支援		
5, 6	Ⅰ 第5章 生活支援技術と福祉用具	講義	⑬
7, 8	福祉機器・バリアフリー展	見学	⑬
9, 10	Ⅳ 第5章「看とる」という生活の支援	講義・実習	⑭
11, 12	Ⅱ 第5章 生活を支える「安全・清潔・感染予防」の技術 Ⅰ 第7章 医療、その他の職種との連携	講義・実習	⑰、⑱
13, 14	振返り／排泄、移乗	実習	
15, 16	施設実習において学んだ実技発表①	実習	
17, 18	施設実習において学んだ実技発表②	実習	
19, 20	Ⅳ 第3章 「眠る」という生活の支援	講義	
21, 22	事例（移動・移乗）	実習	
23, 24	事例（排泄）	実習	
25, 26	事例（着脱）	実習	
27, 28	総まとめ	実習	
29, 30	総まとめ	実習	

※ 1コマ=90分